

弁天娘女男白浪 (白浪五人男)

河竹黙阿弥

知らざあ言って聞かせやしょう。浜の真砂と五右衛門が、歌に残せし盗人の、種は尽き
ねえ七里ヶ浜、その白浪の夜働き、以前をいやあ江の島で、年季勤めの児ヶ淵。百味講で
散す時銭を、当てに小皿の一文子、百が二百と賽銭の、くすね銭せえだんだんに、悪事は
のぼる上の宮、岩本院で講中の枕探しも度重り、お手長講の札付きに、とうとう島を追い
だされ、それから若衆の美人局、ここや彼処の寺島で、小耳に聞いたの、音羽屋の似ぬ色声
で小ゆすりかたり、名さえ由縁の弁天小僧菊之助たア、おれがことだ。

がまの油

てまえ持ちいだしたるは、四六のがまだ。四六、五六はどこでわかる。前足の指が四本、
あと足の指が六本、これを名づけて四六のがま。こがまのところは、棲めるところは、こ
れよりはるかか北にあたる、筑波山のふもとにて、おんばこというつゆ草を食らう。こ
のがまのとれるのは、五月に八月に十月、これを名づけて五八十は四六のがまだ、お立ち
あい。このがまの油をとるには、四方に鏡を立て、下に金網をしき、そのなかにながまを追
いこむ。がまは、おのれのすがたが鏡にうつるのをみておのれとおどろき、たらーり、た
らりと油汗をながす。これを下の金網にてすきとり、柳の小枝をもって、三七二十一日の
あいだ、とろーり、とろりと煮つめたるがまの油だ。

石川啄木

不來方のお城の草に寝ころびて

空に吸はれし

十五の心

東海の小島の磯の白砂に

われ泣きぬれて

蟹とたはむる

こころよく

我にはたらく仕事あれ

それを仕遂げて死なむと思ふ

土佐日記 紀貫之

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。

その年の、しはすの、二十日あまり一日の日の、戌の刻に門出す。その由いささかにものに書きつく。

寿限無

「あらまあ、金ちゃん、すまなかったねえ。じゃなにかい、うちの寿限無寿限無、五劫のすりきれ、海砂利水魚の水行末、雲来末、風来末、食う寝るところに住むところ、やぶらこうじのぶらこうじ、パイポパイポ、パイポのシューリガン、シューリガンのゲーリンダイ、ゲーリンダイのポンポコピーのポンポコナの長久命の長助が、おまえのあたまにこぶをこしらえたって、まあ、とんでもない子じゃあないか。ちょっと、おまえさん、聞いたかい？うちの寿限無寿限無、五劫のすりきれ、海砂利水魚の水行末、雲来末、風来末、食う寝るところに住むところ、やぶらこうじのぶらこうじ、パイポパイポ、パイポのシューリガン、シューリガンのゲーリンダイ、ゲーリンダイのポンポコピーのポンポコナの長久命の長助が金ちゃんのあたまへこぶをこしれえたんだとさ」「じゃあなにか、うちの寿限無寿限無、五劫のすりきれ、海砂利水魚の水行末、雲来末、風来末、食う寝るところに住むところ、やぶらこうじのぶらこうじ、パイポパイポ、パイポのシューリガン、シューリガンのゲーリンダイ、ゲーリンダイのポンポコピーのポンポコナの長久命の長助が、金坊のあたまへこぶをこしらえたっていうのか。金坊、どれ、みせてみな、あたまを。なーんだ、こぶなんざあねえじゃあねえか」「あんまり長い名前だから、こぶがひっこんじやった」

論語

子曰わく、

学びて時に之れを習う、亦た説ばしからず乎。朋有り遠方より来たる、亦楽しからず乎。人したずして慍らず、亦た君子ならず乎。

(孔子は言う。繰り返し学び、友と学問について話し人から評価されずとも怒らないのが学ぶ者の姿だ)

義を見て為さざるは、勇無き也。

(なすべきことをしないのは卑怯だ)

荒城の月 土井晩翠

春高楼の花の宴

めぐる盃かげさして

千代の松が枝わけいでし

むかしの光いまいずこ

早口言葉

生麦生米生卵

赤巻紙青巻紙黄巻紙

隣の客はよく柿食う客だ

特許許可する東京特許許可局

坊主が屏風に上手に坊主の絵をかいた

小林一茶

瘦蛙まけるな一茶是に有

雀の子そこのけそこのけ御馬が通る

我ときて遊べや親のない雀

やれ打な蠅が手をすり足をする

道程 高村光太郎

僕の前に道はない

僕の後ろに道は出来る

ああ、自然よ

父よ

僕を一人立ちにさせた広大な父よ

僕から目を離さないで守る事をせよ

常に父の気魄を僕に充たせよ

この遠い道程のため

この遠い道程のため